博　士　論　文　審　査　書　（課程博士・論文博士）

論　文　名	日本における「ヘンゼルとグレーテル」の受容 —明治期から昭和期まで—		
	（英文タイトル） Reception of 'Hansel and Gretel' in Japan: From the Meiji Era to the Showa Era.		
学籍番号	52319002	氏　名	小泉　直美

所　　見

「論文内容の要旨および審査結果の要旨」は、別紙のとおり

審査結果	可　・　否	学位記番号	第　18　号
主　査　野口芳子 ㊞		副　査　㊞	
副　査　村山功光 ㊞		副　査　㊞	
副　査　前田久子 ㊞		副　査　㊞	

論文提出日	論文審査日	公　聴　会	可否決定日	博士学位授与日
2021 年 11 月 30 日	2022 年 1 月 6 日	2022 年 1 月 29 日	2022 年 3 月 9 日	2022 年 3 月 16 日

論文内容の要旨および審査結果の要旨

この論文は明治期、大正期、昭和期に邦訳されたグリム童話「ヘンゼルとグレーテル」168 話について詳細に検討し、改変の有無および改変理由について学際的に考察しようとした意欲的な論文である。

明治期に 10 話、大正期に 20 話、昭和期に 138 話邦訳版が存在することを緻密な調査によって明らかにしたことは高く評価できる。明治 34 年の東海生訳「一太郎とおすみ」が最初の邦訳であることは先行研究で明らかにされていたが、東海生の実名は不明であった。それが上田敏であるということを文体の特徴、交友関係の資料などを丁寧に当たりながら、ほぼ確定したのは快挙である。

上田敏は『エンゲリン読本』によって「ヘンゼルとグレーテル」を知り翻訳した。「獨逸学協会学校」や「第一高等学校」などで使用された『エンゲリン読本』については長年、詳細が不明であった。その存在の重要さについて言及した点も高く評価できる。

明治期に訳された 10 話についての研究は改変点だけでなく、翻訳者についての調査も徹底し、筆名から従来不明であった実名を数多く割り出し、文学者とジャーナリストが主たる翻訳者であることを明らかにした点も評価できる。

大正期は 13 話とされていたが、新たに 7 話発見し、20 話あることが判明した。大正デモクラシーや児童雑誌発行に伴って翻訳数も増えてくる。原文に忠実版の存在と童心主義をモットーに子ども向きに変えられた改変版の存在が並立する時代である。「お菓子の家」という題名に改変された絵本が出現し、鴨が擬人化されるのもこの時期である。

昭和期には 138 話の邦訳が出現する。それを太平洋戦争以前、以後、高度成長期と大きく 3 期に分けて考察されている。I 期には世界恐慌の影響で安価な「円本」が出回り、大正期の童心主義の影響を残すものが多いが、1938 年 10 月「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が発布され、出版物が統制されると、邦訳本は激減し、検閲を通過するため軍事政権に媚びた内容に改変される。II 期の戦後には状況が一変し、出版数が激増する。敗戦後の社会状況を配慮して、子捨てが削除され、子どもが自ら迷子になり、親子間の愛情が強調される内容に改変されるものが目立つ。題名が「ヘンゼルとグレーテル」から「お菓子の家」に改変されるのもこの頃である。チョコレートやビスケットなど様々なお菓子が出現し、子どもを夢の世界に導くと同時に、お菓子産業の宣伝として絵本が使用されるようになる。III 期に新著作権法（1971 年）が発布されると、題名が再び「ヘンゼルとグレーテル」に戻される。原典に忠実な訳が主流となり、絵本形式での本が主流となる。メディアの発達に伴って、「まんが世界むかし話」でテレビ放映されるようになると、この話の認知度は一挙に高くなるが、同時に子どもの読書離れが危惧される。その結果、全国に多くの「子ども図書館」が設立され、そこに並べるために原文に忠実な絵本の出版が増えることになる。

戦前、戦後、高度成長期と社会の変遷に呼応して改変されていく「ヘンゼルとグレーテル」の姿を「近代家族」に焦点を当て、ジェンダーの視点から分析し考察する昭和期の論述は文学だけでなく、社会学、法学、ジェンダー学など領域横断的な視点から多角的に考察しており、非常に斬新な論文となっている。その点は特に高く評価すべきである。

審査委員 2 名の評価も肯定的なものが多く、とくに資料を掘り起こして 168 話も収集し

た点、筆名から長年不明であった実名を数多く明らかにした点、菓子産業と絵本の関係を指摘した点、出版に関する法律と翻訳本出版の関係を明かにした点、堕胎法の可否に絡んで西洋と日本の子捨をジェンダーの視点から考察した点などが、高く評価されている。

一方、論述不足や改善点として、下記のような指摘があった。

明治・大正期の受容についての論述は各作品について、章立てしてなされているので、詳細に述べられているが、全体を大きく把握した昭和期のような学際的視点からの考察が不足している。その手法を明治期や大正期にも積極的に取り入れていたら、さらに興味深い論文に仕上がっていたであろう。

明治期におけるグリム童話の受容は先行研究では英語教科書によるものとされてきたが、「ヘンゼルとグレーテル」はドイツ語教科書によるものであるということを指摘したのは快挙といえる。改善点としては、邦訳を原文に忠実版、改変版、改作版と分類しているが、その基準が少し大雑把すぎる点であろう。その際、内容という言葉ではなく、モチーフや小道具という用語を用いて説明するとよいのではないか。

今後の課題は、題名を「お菓子の家」に改変した最初の訳者、葉多黙太郎の実名を解明し、その意図を明かにすることであろう。

「ヘンゼルとグレーテル」を明治、大正、昭和という 3 つの時代を通観した学際的な受容研究は日本で初めてのものであり、その意味でもこの博士論文は今後の受容研究に大きく貢献するものであり、博士論文としての合格水準に充分達しているものと判断する。

主査：野口芳子